

6 人々の暮らしの営みを受け入れるプラットフォーム



西山 芽衣
NISHIYAMA Mei | 株式会社マイキー / ディレクター

まちにとって、パブリックスペースはどのような役割を求められているでしょうか。パブリックスペースをつくるために、行政、民間、地域それぞれで何ができるでしょうか。西千葉での実験的な場づくりを通じて、民間が担えるパブリックスペースのあり方や未来を考えます。

西千葉というまち

千葉県千葉市稲毛区と中央区の境、JR西千葉駅周辺エリアは「西千葉」と呼ばれています。戸建て住宅や中層マンション、学生向けアパートが立ち並ぶ閑静な住宅街で、唯一の特徴と言えば千葉大学のメインキャンパスがあることくらいでした。東京へのアクセスもよく、ベッ

ドタウンという側面が色濃くあります。住宅、スーパーなどの生活を支える小売店、保育園や学習塾などの教育サービス、高齢者サービス、駐車場、そして少しの飲食店が並ぶ「住む」ということに特化したまちという印象でした。

2014年の春、そんな西千葉のまちに「新しい暮らし



HELLO GARDEN 全景



住宅街の中に突如現れる HELLO GARDEN

の実験広場」をコンセプトとした私設パブリックスペース『HELLO GARDEN』をオープンしました。オープンから7年が経とうとする今、老若男女のまちの方が日々この場所へ来て、それぞれが思い通りの使い方を楽しんでいます。

計画と実行を同時進行する

私はこのまちにある千葉大学で建築を学び、その後まちづくりの仕事につきました。学生時代から西千葉というまちが好きで、住むための機能でひしめき合う中に埋もれながらも光る魅力に心躍りながら、同時にそれらが少しずつ減っていくことに胸を痛めていたところ、奇跡のような縁が重なって、この西千葉の地域活性化プロジェクトに仕事として携われることになりました。このプロジェクトは個人がクライアントで、地元である千葉への貢献が目的で始まりましたが、スタート当時は具体的な敷地もなく「地域をより元気にしたい」という想い以外はまだまだ模索中でした。

西千葉は商業や娯楽がないだけでなく、千葉市はとても広いので図書館や体育館といった公共文化施設は離れたところに点在し、西千葉に暮らす人々の生活圏にはパブリックな空間がほとんどありません。あるのは街角の小さな公園たちと、小さな公民館くらいです。暮らすには千葉の中でも比較的人気なまちで、空き家や空き地に悩むというよりは、資本主義のしくみ

に身を委ねているとすぐに「住む」ために必要な機能とサービスでまちが埋まっていってしまいます。しかし、「暮らし」には「住む」以外にも「食べる」「働く」「学ぶ」「遊ぶ」などもっとたくさんの要素が含まれているはずで、それらなくしてまちの暮らしが豊かになることは難しいのではないかと危機感を募らせていました。そこで、このプロジェクトでは、「住む」以外の暮らしの風景をまちに生み出せるような場づくりをしたいと考えていました。

そんな中、民家に隣接し通り向かいには小さな公園がある100坪ほどの空き地が売りに出ているのを見つけ、クライアントが購入しました。なに

かのプロジェクトがスタートすると、一般的にははじめに企画を立て、設計をして工事をするというプロセスを踏みますが、それでは使い始めるまでに早くても1年はかかります。せっかく土地があるのに「しばらくこのままにしておくのはもったいないな」という思いがありました。また、まちづくりの仕事をしている中で、想像だけで1つの正解を決めて計画をし、大きなお金を投資して、あとから変更不可能なものをつくってしまうプロセスに違和感を覚えていました。

そこで、まちのリサーチと未来の計画、まちの人々との関係性をつくりつつ、まちの人々が自らの手で暮らしを楽しむためのパブリックな空間がつかれないかと考えました。計画と実行を同時進行する、場づくりの新しい



2014年春、ただの空き地で活動をスタート

プロセスの実験という気持ちで、まったく手を入れていない空き地に『HELLO GARDEN』と名前をつけ、スタートしました。

よくわからないけど、必要な場所

最初の2年はとにかく空き地のまま、できることをやってみました。食に関心が高い人たちとは土を耕して野菜やハーブの種を蒔き、ファミリー層とは週末の遊び場として持ち寄りピクニックイベントを開き、学生たちとはDJイベントや音楽演奏会を行いました。面白がって参加してくれる人もたくさんいましたが、まちとの関係性づくりは想像以上に苦労しました。

「なんだかわからないし何もないけれど、だからこそなんでもできそう」と好奇心を持って入ってきてくれる人もいれば、「なんだかよくわからなくて、こわい」と怪訝な目で遠目から見ている人もいました。怖がる人にいくら言葉で説明をしても、公園でもなくコミュニティ菜園でもなくカフェでもない、既存の概念に当てはまらないこの場所は簡単に理解してもらえませんでした。そして、あまりにもなにもないこの場所に、無関心の人もたくさんいました。「ただの空き地」では人々の関心を引き、安心して入ってきてもらうには、見た目が少々ワイルドすぎて説得力がなかったのです。

そこで、「実験広場のアップデート」に着手しました。不格好な起伏のあった地面を近所の人に借りたパワーショベルを駆使して改造し、草木の苗を植え、いくつかの屋外家具もつくりました。こうして、空き地だった姿から程よく設えられた空間にアップデートしました。

これを機に、スタッフが常駐してドリンクや軽食も提供するスタイルに変更し、イベントの数や種類も増やしました。次第にこの場所を暮らしの中の一部として活用

してくれる人も増えていきました。ママさんたちのお茶会会場、年配の方々の寄り合い所、子どもたちが思い切り遊ぶ公園、ノマドワーカーのオフィス、小さなお店が立ち並ぶマーケット、DJが音楽を流すナイトクラブとコロナと表情を変えるこの場所は、ますます定義が難しくなっていますが、様々な人がそれぞれのスタイルでこの場を使いこなすその振る舞いがまちへの発信となり、なにかをやりたい人がこの場所にその思いを持ち込んで形にするシーンが増えていきました。そして、次第に「よくわからないけど、必要な場所」と捉えてもらえるようになりました。

ほしい景色をつくる実験

HELLO GARDENはただの開かれた広場ではありません。今の暮らしに足りないものは何か、それらをどうやったら自分の手で自分の暮らしの中につくっていけるのか、一人ひとりの小さな試行錯誤(=実験)が許容されるプラットフォームです。「本を好きな人と繋がりたいから古本市を開きたい」「自分の特技を披露する機会をつくりたい」「自分で商いを始めてみたい」など、今よりもっと楽しい自分の暮らしを自分の手でつくりたいという人々が、HELLO GARDENに集い、それぞれの実験を行っています。心地よい暮らしとはなにかを一人ひとりが考えるきっかけと、それぞれが試行錯誤して暮らしをアップデートするための仕組みをつくることで、このまちでの暮らしがより豊かになることを目指しています。

この小さな試行錯誤は、暮らしの営みそのものだと思うのです。本来であれば、パブリックスペースというのは、人々の暮らしの営みを受け入れるプラットフォームであるはずですが。しかし現在パブリックスペースと呼ばれる場にはそういった自由さや懐の広さはなく、だれのもの



月2回、公園の一部も借りて開催されるHELLO MARKET

のもなくなってしまっているように感じます。ただ、行政が管理するパブリックスペースが本来の姿に戻るのには容易なことではありません。新しい考え方や新しい仕組み、まちの人々の価値観の変化が必要です。パブリックスペースが本来の姿を取り戻す未来のために、行政と民間が手を取り合って協力し合う必要があります。その時、民間が担える役割が「軽やかにまずやってみる」ということだと私は思っています。

HELLO GARDENでの取り組みを始めて数年たった頃、HELLO GARDENを使ってなにかにチャレンジしてみる人も増え、その内容によってはHELLO GARDENの中だけではどうしても手狭になってしまうイベントも出てきました。そこで隣の公園をイベント会場の一部として借りられないかと行政に相談にいきましたが、民間企業には貸し出せないと言われてしまいました。そのことを自治会長さんに相談すると、自治会の催しとして自治会名義で申請書を出してくれました。それからは公園を使いたい時は自治会を通して申請しています。

HELLO GARDENの活動を始める前、地域の方との話の中で「公園で子どもの声がうるさい」という声がありました。HELLO GARDENの活動を始めること自体にも、「人がたくさん来てうるさくなるのではないか」「まちなかでそれぞれがやってみようことをやるなんて、い

ろいろな問題が起きるのでは」とたくさんのネガティブな意見がありました。実際活動をスタートしてからも、受けたクレームは数しれず。それが今ではいろいろなイベントを公園で開催できるようになりましたし、それに対して地域からネガティブな声を聞くこともありません。さらには、公園を活用していることを行政も面白がってくれるようになり、そういうことがもっとまちなかで起こるにはどうしたらいいかと一緒に議論ができる関係になりました。

これはもちろん自治会のみさんの協力があるのですが、HELLO GARDENでの人々の振る舞いが自治会やまちの人々の心を動かし、「人々がまちで楽しむ姿やなにかにチャレンジする姿っていいよね」「そういう風景が公園でも起こったらいいよね」という価値観の変化を起こした結果ではないかと思っています。

人はいくら説明をされても見たことがないものは想像できません。状況をつくって実際に見て、体験して、実感をもって理解してもらうということがとても大切だと感じています。そして、それをつくるのが得意なのは行政ではなく民間です。民間がフットワーク軽く新しい景色をつくり、それをまちに実装していく仕組みを行政がつくる。そんな連携ができればまちを変えていく動きが加速するのではと思っています。



学生たちが主催した音楽イベント「BON ODORI night」



地域の方が主催した「西千葉一箱古本市」